



フランス文学研究室 NEWS

令和2年4月1日
第8号

この号の内容

- 1 イベント報告
- 2 在学生数
- 3 修了生進路
- 4 学部生の声
- 5 特集
東北大学フランス語映画プロジェクト
「Qui suis-je (わたしはだれだ)?」
脚本インタビュー
- 6 留学生の声
- 7 特集
「私のフランス語勉強法」
- 8 編集後記
- 9 ホームページのご案内

イベント報告

2019年5月18日

Renaud N'dri 氏 (アラサン・ワタラ大学博士課程) 講演会
「Contacts des langues et variations linguistiques en Côte d'Ivoire」

2019年7月11日

Alain Hien 氏 (東北大学大学院国際文化研究科博士前期課程) 講演会
「L'apprentissage du genre grammatical du français : le cas des jeunes apprenants
du Burkina Faso」

2019年10月29日

深井陽介先生 (高度教養教育・学生支援機構) 映画プロジェクト
「わたしはだれだ?」第3話公開

2019年11月30日

日本フランス語フランス文学会 東北支部大会
シンポジウム「フランス教育の今, これから」

2019年12月20日

Michaël Ferrier 先生 (中央大学文学部教授) 講演会
「ミカエル・フェリエを囲んで: Autour de Michaël Ferrier」

在学生数

学部生 7名 / 博士前期課程 5名
研究生 3名 / 博士後期課程 3名
計 18名

修了生進路

東京国際大学専任講師
科納茲精密工具有限公司
みずほ総合研究所(株)
(株)リンクアンドモチベーション



学部生の声 クロワッサンとか

第二外国語としてフランス語を学ぶ学生はフランス語にどのような印象を持っているのだろうか。日本思想史を専攻している橋本小次郎さん(文学部3年)にフランス語への思いを率直に語っていただいた。

仙台駅に向かう途中、ロフトの下の和傘屋の前を通る。そういえばこの前 parapluie(雨傘)っていう単語を覚えたぞ、pluieは雨の意味で、para-は防ぐっていうのを表す接頭辞だったな、そうそうだからパラソルってのは「ソル」を防ぐってなわけでソルというのはすなわち太陽だよな、と駅舎の入り口をくぐるころには傘から仏語を経由して色々なことを考えている始末である。

さて、原稿の依頼を頂いたところ甚だ申し上げにくいのだが、私には仏語を学ばなければならない理由が、特にない。例えば第二外国語として仏語を選んだ理由を問われれば、フランス哲学が好きだからだとか、世界中の人に学ばれているからだとか、セゾン UC カードのCMで瓦割りをしていた女性の歌が素敵だったからだとか、いくらでも答えられる。しかし、「カントではなくベルクソンに軍配を上げた理由は?」「中国語とかの方が母語話者は多いよ?」そのように訊かれると困ってしまう。まして私の専攻は日本思想だ。自分でも時々悩む。私に留学をも決断せしめたフランス(語)の魅力って、なんだろう?やはり身近にそれが溢れているからだろうか。最近はある。

クロワッサンを見て月が満ちていくさまを思い起こすとき、そして幼いころに漫画で覚えた「アンニユイ」な気持ちになると、私は記憶の中に影を潜めていた宝石が光を放つ瞬間を見る。きつこうやって点と点を線で結ぶようにして私はフランスまでの道を辿るんだろうなと、そんなことを考えた三年次直前の春休み。

(文学部3年 橋本小次郎)

特集 東北大学フランス語映画プロジェクト 第2弾！
《 Qui suis-je (わたしはだれだ) ? 》 脚本インタビュー



<https://youtu.be/K9EwzbKvDCw>
映画のアドレスはこちら↑



Matsushima qui était chargée des opérations

第三話で八乙女淳役を演じる黒井さん

仙台を舞台とした探偵映画《 Qui suis-je ? 》第3話が2019年10月に公開された。本映画は深井陽介先生のプロジェクトであり、フランス語を学んでいる学部生が中心となって制作したものだ。今回はこの映画プロジェクトの脚本担当である黒井駿さん（文学部3年）にインタビューを行った。

——黒井さんは、第一話から脚本担当として本プロジェクトに関わっております。最初の質問として、脚本とはどのような仕事をするのですか。

簡単にいうと、ストーリーの内容を作る仕事です。登場するキャラクターやセリフ、舞台など様々な要素を検討して、ひとつの小説の「ような」ものを作ります。そして、できたものを毎週、脚本会議で提案し、全体の承認を求めるのも役割の一つです。

——脚本会議でまとめあげられたものが作品になっていくのですね。その過程で数々の困難にぶつかったと思います。これまでの脚本を作る過程で大変だったことはなんですか。またそれをどのように乗り越えたか、教えて頂いてもよろしいですか。

脚本制作の上で、全体で合意された約束事がいくつかあるのですが、それが時に悩みの種となります。例えば、プロジェクトの性質上、日仏の文化の違いを取り扱わなくてはなりません。文化の違いなど枚挙にいとまがないでしょうが、それを①面白く②作品に深く関連するように③事件のトリックに採用するとなると非常に難しい問題となります。脚本会議で多くの方の知恵を拝借してもすぐには出てくるものでないで、脚本を書くたび悩まされました。こういうときに役に立つのが、潔く書き直すことです。たとえ物語が完成しても、こじつけの連続に見えないように、一度すべて解体して練り直す。その方が良い内容になり、意外と完成が早いことがありました。愛着のある脚本でしたが、品質向上のためなら仕方がないことでしたし、監督やプロデューサー始め多くの方に協力していただいたこともあって、なんとか乗り越えることができました。

——公開された第三話では黒井さんは役者としても活躍されています。初めて役者になった感想を聞かせてください。

最初は自分の手際次第で撮影スケジュールが後に押ししてしまうことに不安がありました。今回初めて役者として演じたことによって、役者として常にこの緊張感に身を置いている先輩方を一層尊敬するようになりましたし、実際にフランス語の発音もいくらか良くなった感覚があるので、役者を経験できて良かったと思います。

——黒井さんの専門は英語学と聞いております。映画プロジェクトに参加して、専門に活かせることなどありますか。

私の専門とプロジェクトとの間に直接的なつながりはなく、専門に利するような何かを求めたことはありません。しかし、フランス語学習を拡張したようなこのプログラムは非常に中身が濃密で、語学としての威力は絶大であると思っているので、将来英語教育の分野に就きたい身の上として、面白く、効率的な言語学習法の一例に出会えたことは非常に貴重であったと考えています。

留学生の声 初めての日本生活

日本へ来て半年になります。今回は初めての海外経験ですから、最初は別の世界にいるように感じました。仙台は静かで、きれいな町です。人も少ないし、中国と雰囲気とは全然違います。

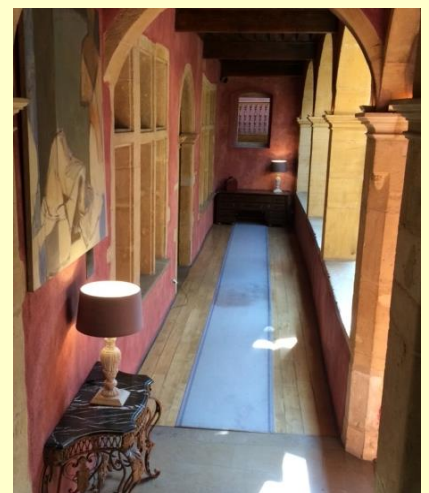
日本に来る前、私は日本人に対してとても慎重で用心深いという印象を持っていました。しかし、実際、日本人は優しい人が多いです。私は外国人として、日本でも暖かさを感じました。私は日本語が苦手なので、あんまり敬語を使えませんが、皆さんは私に対して全然怒っていません。本当にありがとうございます。

日本に来て、最初に好きになった食べ物はラーメンです。毎日近くのラーメン屋に行ってラーメンを食べていました。最近は油そばが好きです。仙台駅近くの「政宗」という油そばの店がお気に入りです。

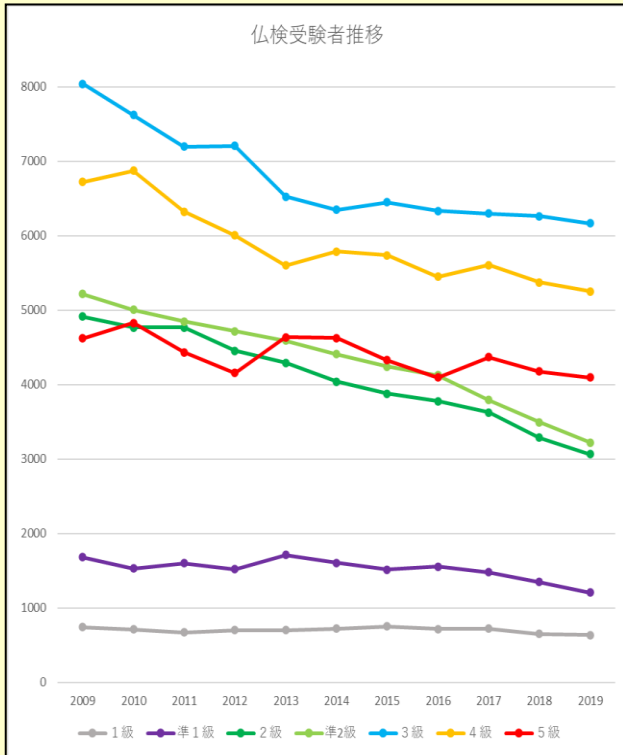
日本に来て、中国では珍しいことをたくさん見ました。例えば「土足厳禁」です。これは中国で見たことありません。最初は理解不能でしたが、今はちょっと慣れました。また、日本のごみ分類はすごく難しいです。毎回ゴミを捨てる前に、どのゴミ箱に入れるべきかを確認します。現在、中国ではあまり使われていない切手や封筒は、日本でもまだ広く使われています。懐かしかったです。

また、日本に来て、初めて学校の文化祭を体験しました。すごく面白いと思います。アニメの中の文化祭とはちょっと違うと思います。そして、新年の初詣も体験しました。初めて日本で新年を過ごしました。2020年はもっと日本の文化を体験したいと考えています。

(研究生 朱泰焯)



特集 私のフランス語勉強法



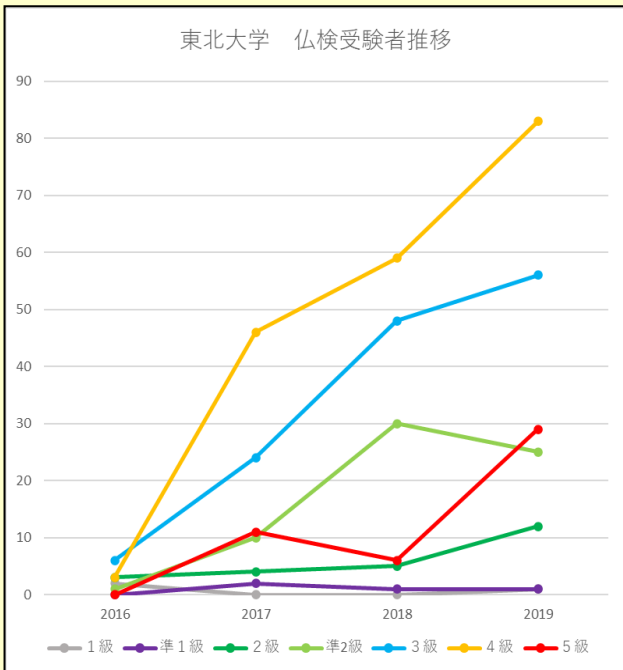
はじめに

実用フランス語技能検定試験（以下、仏検と省略）のホームページでは「仏検だより」や「学習のツボ」など、たくさんの有益な情報が発信されている。そのなかのひとつに「仏検データブック」というものがある。そこでは仏検の合格基準点や合格率、出願動向などといったデータが公開されている。その出願者のデータを基にグラフにしたものが左図である。一方、2016年から2019年の4年間における東北大学の仏検受験者数をグラフにしたものが下図である。

この二つのグラフから全国的な受験者数の減少に対して、ここ数年で東北大学は準2級から5級の受験者数を大きく伸ばしていることが分かる。その理由のひとつに上記の映画プロジェクトによって、フランス語に触れる機会が大幅に増えたことが挙げられよう。一方で1級から2級までの受験者は十分とはいえない。確かに2級からは難易度が上がるため、受験者が減ることは当然とも言えよう。しかし、フランス語の勉強が楽しくなってくるのは2級以上からだとは感じている。テレビやラジオ番組の内容が少しずつ掴めてくる。雑誌の記事が少しずつ分かるようになっていく。フランス語の勉強が楽しくなってくる。このような体験、ぜひとも皆さんにもしていただきたい。

そこで仏検1級、準1級を合格した二人の院生に自身のフランス語勉強法を話していただいた。その勉強法にはフランス語を楽しみながら勉強する秘訣が隠されていることだろう。

(グラフ出典：仏検データブックより佐藤圭一郎作成)



仏検と DALF

私は2019年に仏検1級とDALF C1に合格しました。フランス語を始めて十年ほど経ちましたが、やっとここまで辿り着きました。2020年にはC2取得を目指しています。私のフランス語勉強法ですが、基本的にはフランス語やフランスやフランス語圏の文化に関することは全て吸収するつもりでやっています。人それぞれ向いているやり方があるとは思いますが、オタクというかコレクター気質のある私にはこういったやり方が楽しいようです。

しかし試験に臨むとなった場合、話は別です。効果的なやり方というものがあるので、まずはそれを意識するところからでしょう。まずは試験がどういうものなのかを把握しましょう。対策本を読むもよし、先生や先輩に頼るもよし、ネット上のブログを読むもよしです。英語の話になってしまいますが、私は学部生時代にTOEICを受け、一度目は一切勉強せず、二度目はとりあえず模擬問題を一通り解いただけの状態でも臨んだのですが、それだけでも100点以上点数が上がりました。DALF C1の場合は、文章作成問題があり、その際にはフランス的な文章構成が前提とされています。幸い私の場合は学部時代に留学していた学校の試験でdissertationがあったため文章の展開の仕方の基礎は分かっていたのですが、おそらく日本、あるいは英語圏な

などで教育を受けた人の場合は特別に訓練する必要があると思います。対策本でも対策できると思いますが、可能なら先生や留学経験者、ネイティブの人に積極的に頼ってしまいましょう。

また、自分の傾向を把握しておくことが重要です。もちろん万全に対策をしておくに越したことはないですが、実際には皆さん忙しかったり、体調を崩したりして計画していた通りに勉強が進まないこともあると思います。その時は点数を取ることを重視しましょう。私の例になりますが、私は問題を解くのが遅いです。細かいことが気になってしまい、そちらに集中しているうちに時間が過ぎ最後まで解けないことが多いです。そこで、不安でもとりあえず最後まで解いた場合と一問一問じっくりゆっくり解いた場合では、どちらがより高得点を得られるか考えました。そして不安でもとりあえず最後まで解くことを優先しました。またC1の文章作成ではとにかく分量を増やすこと、仏検では苦手な書き換え問題は早々に切り上げて、後半の長文問題を優先することを選びました。この自分の得意不得意を把握するためにも模擬試験や過去問を絶対におきましょう。

それに加えて、日頃から日本とフランスを比較する視点を持つておくことは、仏検とDALFの両方に有効です。なぜなら、二次試験や口頭表現で何を話したらいいかわからないという状況が避けられます。(次頁に続く)

語学は結局のところ続けたもの勝ちです。フランス語の勉強もいかに楽しく長く続けられるかが大事だと思っています。個人的におすすめなのは音楽です。音楽は楽しいうえにリズムがあるので練習しやすく語彙の幅も広がります。特にラップが良い練習になりますね。おすすめはHyacintheです。学習法は人の数ほどあるので、私の話はその一つの例として捉えていただき、皆さんそれぞれのベストなやり方を見付けてもらえたら幸いです。

(博士前期課程2年 菊池優希)

テレビ学習のすすめ

私の主なフランス語学習法は、フランスのテレビを毎日視聴することです。フランス留学中にフランスのテレビ番組を知り、帰国後も語学力を向上させたいと思っていたときに、日本でもフランスのサイトから番組をリプレイできることを知り、見始めたのがきっかけでした。はじめはネイティブの話すスピードについていけず、内容を理解するのに苦労していましたが、それでも映像を頼りに見続けると、耳がネイティブのスピードに慣れたのか、内容をよく理解できるようになりました。できなかったことができるようになり、今までとは違う世界を見られるようになるというのは、学習へのモチベーションにつながります。



私のお気に入りの番組は、Top ChefとLe Meilleur Pâtissierです。若手料理人や若手パティシエが制限時間の中でテーマに沿った一品を作り、それを有名シェフがジャッジして優勝者を決めるという料理コンクール番組です。料理の腕や創造力を競い合う中で生まれるドラマが面白いのはもちろんのこと、日本を少し感じられるのも私が惹かれる理由の一つです。例えば、Top chefに出場した在日ベルギー大使館の料理人は、フランスではまだ広く知られていないポン酢などをつかい、日本料理とフランス料理を融合させていました。Le Meilleur Pâtissierでは、日本人パティシエのモリ・ヨシダがピエール・エルメをはじめとした一流パティシエらによって、その技術と繊細さを高く評価され、2年連続優勝したことを同じ日本人として誇りに思いました。また、これらの番組を通して、ネイティブが会話の中で話すスピードに慣れ、ナチュラルな言い回しを学ぶことができました。

日仏を比較して、考えさせられることもあります。あるニュース番組では、廃プラスチックを減らそうとする食品メーカーの取り組みや、食品や液体石けん類を自宅から持ってきた瓶に詰め替えて購入する消費者が紹介されており、私自身も環境問題やオーガニック製品などについて関心をもつようになりました。同時に、環境問題に対する日本人の疎さを痛感しました。

語学向上のために始めたテレビ番組の視聴でしたが、今では異文化理解や社会問題への理解を深めることにも役立っています。物事を続けていく上で、興味をもって楽しんで取り組むことはとても大切ですが、私の場合、食事中にテレビを視聴していることから、わざわざ時間を割く必要がないことも、無理なく学習を続けられている理由の一つではないかと思えます。今後も“つかえるフランス語”の向上を目指して、学習を続けていきたいです。

(博士課程前期2年 柞野友那)

編集後記

本誌の特集の立案、各記事の編集を担当した佐藤と申します。

今回は2つの特集を組みました。前号の映画監督インタビューに続いての脚本インタビューと所属学生のフランス語勉強法です。

「私のフランス語勉強法」の企画は、仏検のホームページ「合格者の声」から着想を得ました。「合格者の声」は社会人で仏検に合格された人の意見が多数寄せられています。私にとって、将来どういった業種や場所でフランス語を活かせるのか、それを考えるきっかけになりました。

最後になりますが、記事執筆に協力してくださった方々、そして本稿を読んでくださった皆様に御礼申し上げます。

(博士課程前期2年 佐藤圭一郎)

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

シンポジウムや講演、映画プロジェクトなど、多くの情報を随時更新中です。是非覗いてみて下さい。

「フランス文学研究室 NEWS」に関するご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

E-mail : issa3511@gmail.com